

『ジャガーノート』

-Juggernaut-

(1974年公開) ※DVDレンタル・販売あり

豪華客船ブリタニック号に爆弾が仕掛けられた！
知る人ぞ知る英国サスペンス映画の最高峰

賑やかなブラスバンドの演奏の中、船と岸壁を結ぶ色とりどりの紙テープが風に舞う。そんなシーンから、今回紹介する映画「ジャガーノート」は始まる。「ボー！」というサウサンブトン港に響き渡る汽笛の音と共に船は動き出し、紙テープをたなびかせながら、1200人の乗客を乗せた豪華客船「ブリタニック」号は、ゆっくりと岸壁を離れてゆく。乗客も見送り客も大きく手を振り、華やかな船出のはずなのに、乗客たちの表情はなぜか誰も晴れやかではなく、どこか憂鬱さが伴っているのは天候のせいであろうか。冬のイギリスは曇りの日ばかりが続き、空も海も灰色一色に染まっている。ともかく最初から、不穏な空気感を漂わせている映画である。

予想通り天候はますます悪化し、

改装と共に設置された船の横揺れ防止「ジャイロ」は、4万ポンドもしたのに、中古だったせいとか、船は大きく揺れていた。そんな状況であつても船内イベントは開催。卓球場には撮影した写真が展示されたり、船員が陽気に振る舞ったり、乗客を楽しませようとするが、謎の爆発、船の回航、輸送機からパラシュートで降下してきた男たちに、乗客は不安でそれどころではない。

そして、ついに船長から事件を知らされる。爆弾を仕込んだドラム缶を船にセットした犯人は、解除の仕方を教える代償として50万ポンドの大金を要求していた。

実直で本物志向の
硬派イギリス映画

目も、映画に登場する「ブリタニック」号も沈没しないので、ご安心を。

マルタ会談の会場として
歴史にその存在を残す

さて、映画の「ブリタニック」号に使われているのは、1969年に当時の西ドイツで戦後初の大型客船「ハンブルグ」として建造され、その後「ハンゼアテック」に改名した船である。本当に荒れた天候に航行させ、船内や甲板の様子も黒い海面のうねりも全て本物だ。

映画出演を経て、映画公開の1974年にソ連へ売却され「マキシム・ゴリキキー」と名乗り、クルーズ船として活躍。1989年12月には、東西冷戦終結宣言が行われた米ソ首脳会談、通称「マルタ会談」の会場として、ブッシュ大統領とゴルバチョフ書記長を乗せ、歴史的にもその存在を残した。ソ連崩壊後、船籍をバハマに移し、生まれ故郷ドイツに戻り、フェニックス・レイゼン社のチャーター船として活躍。日本にも2008年3月、東京港と大阪港に寄港し日本でも話題となり、2009年に惜しまれながら引退した。

(クルーズ映画ライター あいさわみき)

1974年の日本公開

時には「脱出不可能！」の文字が宣伝広告に躍った。しかも「サブウェイ・パニック」、その名の通り地下鉄乗っ取りを題材にしたパニック映画と2本立てだった。1970年代までは映画は2本立てが多かった日本ではあるが、なぜこの組み合わせになったのだろうか。

1972年公開したアメリカの海洋サスペンス映画「ボセイドン・アドベンチャー」が世界的大ヒットを記録し、「パニック映画」という新しいジャンルを確立。人々は新たなパニック映画を求め、また映画業界は2匹目のドジョウを狙う、そんな時代だった。

イギリス映画「ジャガーノート」は派手なアメリカ映画と趣向が180度違い、ドキュメンタリー映画のようで、はつきり言ってしまえば地味。その実直で本物志向なところがイギリス映画らしく良いところなのだが、興行主から見れば心配があつたと思われる。映画タイトル「ジャガーノ



「青か赤か」、切るリード線を間違えたら爆発する。爆発物処理チームのファロン中佐が選ぶのはどっちだ？

紙テープのセレモニーは日本人のアイディア！
万国博覧会での失敗が、感動の新習慣になった

船で旅立つ人と見送る人を結ぶカラフルな紙テープは、誰もが知っているような有名な儀式であるのに、実は正式名称がなく、船によって「紙テープ投げ」「紙テープセレモニー」、海外では「ストリーマー(吹き流し)」と呼ばれているという。この紙テープで見送る習慣の始まりに、日本人が関わっていることはご存知だろうか。

1915年(大正4年)に、パナマ運河開通および太平洋発見400周年を記念して、万国博覧会がサンフランシスコで開催された。日本からも数社が出展。その一つ、東京・日本橋の「笠居株式会社」は包装用の紙テープを出品したが、布のリボンで商品を飾る習慣のある西洋人に全く受け入れられず、大量の在庫を抱えてしまった。これを何とか利用できないかと考えたのが、当時サンフランシスコに在住していた日本人実業家の森田庄吉だった。

紙テープを安く買い取り、港に持って行き、「テープで別れの握手をしよう」というキャッチフレーズで売り出したところ、これが大ヒット。イ

ギリスでは、古くから捕鯨船の出帆時にマストや旗竿から赤や青の長いリボンを吹き流して豊漁を祈る習慣があつたので、森田のアイディアはすんなり受け入れられたのだ。万国博覧会ということもあって、あつという間に、全世界に広がった。

現在、セレモニーで使われている紙テープは、水溶性かつ無害なもので、岸壁に残った紙テープを清掃する業者を雇うのがルールとなっている。業者に依頼できない場合は、船会社の社員が出航後にもちろん清掃している。

紙テープを投げるコツは、人差し指と中指を真っ直ぐ伸ばして、紙テープを縦に真っ直ぐと投げること。紙テープを持参するなら、環境に優しい水溶性のものを選び、必ず中の芯を抜くこと。テープの芯が見送りの人に当たったら危険だからだ。豪華客船であれば、船であらかじめ準備されているので、それを使おう。なお、紙テープを禁止している港もあるの、一人紙テープセレモニーはやらないうちに。